

鱗祭 第二弾

拡大版
目から鱗BOOK

昨年「鱗祭」に引き続き、今年も11月号では「読書の秋」にちなんで編集部員が一度に11冊の本を紹介し、十人十色な編集部員が紹介する本の中から、きっとお気に入りの1冊を見つけることができるでしょう。



今回紹介している本の一部は、吉田ショップにて11月末まで販売しています！興味を持ったらずひ読んでみてください！

UROKO MATSURI UROKO MATSURI



裕三 のおすすめの本
あの夏を生きた君へ

著 水野ユ一リ



記事執筆者のコメント
大学生が読むには少し物足りなさを感じるかもしれないが、その分非常に読みやすい作品である。ちょっとした気分転換に読んでみてはいかがだろうか。

思うように物事が進まない。周りが自分をまったく理解してくれない。どうして自分だけが……。自分のつらさを嘆く。そんなとき、自分を本当に大切にしてくれている人はいないのではないだろうか、と思う。でも本当にそうなのだろうか？

学校でのいじめに耐えきれず、不登校になってしまった中学2年生の桐谷千鶴。彼女は人生に対して夢も希望も無く、ただ漠然と死への憧れを抱いていた。しかし千鶴は、優しい「ばあちゃん」にだけは心を開き、胸の内を明かしていた。ところが、その「ばあちゃん」は突然倒れてしまい、緊急入院することになる。大事な人が死ぬかもしれない不安に襲われる千鶴。その上、自分を理解してくれない周囲にいらだちを感じ、両親との関係の悪さも相まって、千鶴は自暴自棄になってしまっていた。

そんな千鶴の前に、幽霊のユキオが現れる。ユキオはなんと「ばあちゃん」の初恋の相手であった。彼は「ばあちゃん」との思い出の宝物が入ったタイムカプセルを探し出してほしいと千鶴にお願いしに来たのだ。千鶴は苦戦しつつもタイムカプセルを探すことを通じて、ユキオの過去に触れ、周囲の人の本音にも触れ、家族の大切さ、命の尊さに気が付き始めていく……。

本書は、いじめ、家族、生命といったさまざまなテーマを含み、つらいことを前にした時にその困難に向き合う大切さを教えてくれる。読み終えた時には、生命とは何か、生きるとは何なのか、読者に考えさせてくれる物語である。苦難を突きつけられても、踏ん張って一步踏み出す勇気をくれる。ぜひ読んでみて、まっすぐ進む力を受け取ってほしい。



渡舟 のおすすめの本
オオカミ族の少年

著 ミシェル・ベイヴァー
訳 さくまゆみこ



記事執筆者のコメント
この本の謎めいた世界観に、酒井駒子さんの手がけた味わい深いタッチの表紙が見事に彩りを添えています。表紙を見て楽しむのもまた一興の作品です。

無機質な街の中で、最後に自然を感じたのはいつのことだったか。造られた自然があふれる現代で、その自然は“本物”と呼べただろうか。この作品は、かつてあったはずの雄大な自然を生き生きと描いている。

舞台は約6000年前のヨーロッパ。人々は狩りで生計を立てざるを得ず、常に飢えの危機と隣り合わせの生活を送っていた。そんな厳しい環境で他の人間と関わりなく、森で父と2人で暮らしていた少年、トラク。しかしある日、父は巨大なクマの悪霊に殺されてしまう。死ぬ間際、父はトラクに言い遺す。仇の悪霊は強大で、まともに立ち向かっても勝ち目はない。いまだ誰も見たことのない“天地万物の精霊”が宿る山を見つけ、悪霊を倒せ、と。

父を失い、独りになってしまったトラクは、偶然同じ時期

に家族を亡くした子オオカミ、ウルフと出会う。そこでトラクはあることに気付く。驚くべきことに、彼はオオカミと話せたのだ。ウルフの助けを借りながら山々が連なる北を目指すが、未熟な少年の前にはさまざまな困難が立ちちはだかる。森で暮らす敵意にあふれた他の人々、父を殺した悪霊、そして何より険しい自然。トラクの視点から描かれる道中が厳しくも美しく読者に迫ってくる。

この作品の特徴は、オオカミであるウルフの視点のパートも持つことだ。オオカミ故に色彩を持たないはずのウルフから見た世界が、かえって鮮やかに物語を彩る。人間とオオカミ、2つの視点を行き来することで軽快なテンポが生まれ、読者を捉えて離さない。そうして読み終えた時には、登場人物の持つ自然への畏敬が確かに胸に残るはずだ。



青椿 のおすすめの本
定食学入門

著 今枿二



記事執筆者のコメント
新書と一口に言ってもそのテーマはお堅いものから身近なものまで幅広くあります。この本をきっかけに他の新書にも興味を持っていただけたら幸いです。

読者の皆さんは、昼食を大学生協の食堂で取ることが多いだろう。カフェテリア方式で自分だけの定食を作り上げていくとき、「定食」の定義について疑問を抱いたことはないだろうか。たとえば、ササミチーズカツとライスSサイズだけで定食と呼べるのか？ では、そこにみそ汁を足したなら？ このような疑問を抱いたときに読みたいのが、『定食学入門』だ。この本を読めば、「定食とはご飯、おかず、汁の三位一体である」という1つの答えを得ることができる。

この本では、自らを「定食学徒」と称する筆者が定食について論じている。おいしい定食屋の見抜き方から始まり、定食の定義からさまざまな主菜の解説、果ては定食の歴史や全国各地における定食文化の特徴に至るまで、その内容は多岐にわたる。ちなみに、京都における定食文化については、大

学生の多さからくる定食屋の多さと、ご飯大盛り無料などの気前の良さから「私にとっては京都はじつに素晴らしい街」と述べられている。また、定食屋の具体例として、京大生にもなじみが深いであろう店がいくつか挙げられている。身近な例が挙げられていることで、共感しながらこの本の論ずるところを理解できるのではないだろうか。

文中で料理を紹介する際の詳細な描写もこの本の魅力である。特に主菜の紹介を行っている部分では、読んでいるうちに空腹感を覚えてしまうほどそのおいしさが鮮明に描き出されている。そのため、この本を読み終わった後には定食を実際に食べたくなっていることだろう。皆さんもこの本を読んで定食についての理解を深めた後は、実際に食堂を訪れて「実地研修」を行ってみてはいかがだろうか。

はみだし
すてーじ

せめてペットを飼いたい
⇒私を飼いたい？ 仕方がないなあ……。

(農・3 こっこ)
(一日三膳で手を打ちましょう；編)

はみだし
すてーじ

皆さん先日の豪雨は大丈夫でしたか？
⇒私の家はすさまじい勢いで雨漏りしました

(情・院 黒猫の三角)
(地震で屋根にヒビが入ったせいでした；編)



小市民 のおすすめ本

かくしごと

著 久米田康治



記事執筆者のコメント

作中で描かれるエピソードの多くは作者の実体験をもとにしているそうです。漫画家という描く仕事に対するイメージが変わるかもしれません。

人に絶対知られたくない隠し事は誰も抱えているものだろう。その中でも特に知られたくないのは親しい相手への隠し事。知られたら相手との関係にひびが入ってしまうのではないか。そんな恐れが頭をよぎり、嘘に嘘を重ねてしまう。今回取り上げる漫画『かくしごと』で扱われているのはそういう類いの隠し事である。

主人公である後藤可久士^{ごとうかくし}の隠し事は描く仕事。下ネタ中心のギャグ漫画家だ。可久士は自身の職業に負い目を感じ、一人娘である姫に対して必死になって隠している。しかし一緒に働くアシスタントや編集者はいずれ劣らぬトラブルメーカー。可久士には職業がばれそうになるピンチが次から次へと襲い掛かる。姫に嫌われたくないと、必死になって職業を隠す可久士の奮闘は滑稽だがどこか哀愁が漂う。

この漫画のテーマとなるのは仕事と子育ての関わり方だ。仕事の進行が不規則な漫画家という職業は子育てに向けた仕事とはいえない。その上、可久士はシングルファザーだ。妻とは姫が幼い頃に死別している。可久士は片親故の不自由さや悲しみを姫に感じさせまいと、周囲の人の手を借りながら、時には職場と自宅の間をひっきりなしに往復する無茶なスケジュールをこなして、一生懸命子育てに努める。可久士の父親としての姿は常に一人娘への気遣いと深い愛情を感じさせる。

「かくしごと」を抱えながらも可久士は姫にとって理想的な父親であろうとする。穏やかなユーモアを交えた視点で父親を描いたこの作品は、仕事や家族について考えるきっかけを与えてくれる。



ふえい のおすすめ本

夜の写本師

著 乾石智子



記事執筆者のコメント

物語世界の地図が挿入されているファンタジーを読むのって、わくわくしませんか？ 秋の夜長の読書体験にぴったりな、本格ファンタジーをご紹介します。

動物を操るウィダチスの魔法、呪いにたけたガンディール呪法に、宝石を用いる貴石占術。色とりどりの魔法を意のままにするのは、その身に闇を背負う魔道師たち。今回紹介するのは、そんな鮮やかな魔法と闇と人間の物語だ。

右手に月石、左手に黒曜石、口の中に真珠。3つの品を持って主人公カリュドゥは生まれた。大魔道師アンジストによる治世のもと、平穏な時代を享受しているかに見えるエズキウム国の片隅で。彼の人生は、アンジストに目の前で育ての親を殺されたことで一変する。他を侵し、力を奪うことでより強大になる大魔道師を滅ぼすため、カリュドゥは魔道師とは異質な魔法を操る「夜の写本師」となる。彼の復讐は、かつてアンジストにおとしめられた3人の魔女の人生と交錯していく。呪われた因縁を断ち切るべく、カリュドゥは魔力を込

めた写本の技術で、大魔道師に挑んでいくことになる。

本作の大きな魅力は何と言っても登場する魔法の奥深さにある。主人公が写本師として本を作ることで発動させる魔法の他にも、目も眩むようなさまざまな魔法が次から次へと登場する。しかし、物語世界において魔法は決して万能ではないし、便利なものでもない。魔法を操るということは、人間なら誰も持っている心の暗部と向き合うことに他ならないのだ。魔道師たちは自身の闇に加えて、魔法に関わる他人の闇をも背負うこととなる。それ故に登場人物は、魔法を使う者も使わぬ者も、生々しいほどに人間らしく描かれている。人間性の織り成す複雑なドラマと、綿密な魔法の描写。現実味と虚構性のあわいに、読者は純粋な読書の楽しみを見いだすだろう。

UROKO MATSURI



雪鯨 のおすすめ本

肩胛骨は翼のなごり

著 デイヴィッド・アーモンド
訳 山田順子



記事執筆者のコメント

友人に薦めたら「表紙が怖い」と言われました。この本を原作にした映画もホラーに分類されるそうですが、作品自体は怖くないので安心してください。

背中^{けんこうこつ}に手を回して、肩の辺りに触れてみると、肩胛骨が張り出していることに気が付くだろう。まるで、そこにはもっと大きな、別の器官があったかのように……。

「肩胛骨は、人間が天使だったときの翼のなごりだといわれている。いつかある日、またここから翼が生えてくるって」

主人公、マイケルはある日奇妙な存在に出会う。妹が生まれたのを機に引っ越した矢先の話だ。前に住んでいた老人はこの家で死んでおり、敷地にはその生活の痕跡がそのまま残っている。その1つ、今にも崩れそうなガレージの中に“彼”はいた。ほこりとハエの死体にまみれた“彼”は、グロテスクだが強く心惹かれる存在感があった。一体何者なのか？ マイケルは“彼”と交流する中で、不思議な経験をする。

亡くなった前住人を思い出させる品々、入退院を繰り返す妹、そして傍目には死んでいるような“彼”——死を想起させるものに囲まれた生活の中で、マイケルは死を恐れ、妹の生を願い、いま目の前にいる者を救おうとする。マイケルの描写はあくまで淡々としていて、自身の葛藤を表に見せない。しかし文字に表れない部分を読み取れば、少年の感情が強く揺さぶられていることに気が付くはずだ。不安、希望、驚き——本を閉じた時には、複雑に絡み合った得も言われぬ思いが私たち読者を包み込む。

“Skellig”という簡素な原題は、想像を膨らませるような邦題となって生まれ変わった。そして、翼の生えた人間と言えば、これもまた、死と結びつく存在であるのだ。生と死の狭間で幻想を体感してほしい。



一沫 のおすすめ本

浜村渚の計算ノート

著 青柳碧人



記事執筆者のコメント

学校で習ってきたいわゆる「数学」とは、数学の小指の爪みたいなもの。本物の数学は、「すごい」と驚く美しさを常に併せ持つんですよ。Have a nice math.

学校教育から、数学をはじめ理系科目が消えた。義務教育が少年犯罪の増加に関係しているという論文が発表された結果、物事を数値化する理系科目は、心を尊重し他人を慈しむ人間性を否定しようとして次々に削減されたのだ。

「私は、義務教育における数学の地位を向上させることを要求する。」そう告げて、天才数学者、高木源一郎率いる組織“黒い三角定規”はテロ活動を開始した。過去に高木が開発した数学の教育ソフトは直近20年間、高校や予備校で使われていた。今までにそのソフトを使って数学を勉強した人は、黒い三角定規によって簡単に操られてしまうということが発覚したのだ。黒い三角定規は読者も悩むようなあらゆる数学の力を使って警察を翻弄する。そこで警視庁黒い三角定規・特別対策本部は、操られる危険性のない中学2年生の数

学大好き少女、浜村渚に協力を仰いだ。なぜ0で割ってはいけないのか、なぜ負の数と負の数の積が正の数になるのか。そのような問題でテロ組織は対策本部を悩ませ、同時に読者をも苦しめる。そんなときは渚が一つ一つわかりやすく教えてくれる。数学の知識がなくても楽しめるが、知識があれば思わずニヤリと笑える伏線がいくつも張られている本だ。

黒い三角定規のメンバーにはどこか憎めないところがある。それはおそらく、彼らから数学に対する愛が感じられるからだろう。数学の美しさは一度知ってしまうと、だれもが魅せられてしまうものではないだろうか。読者の皆さんにお願いがある。数学美を前に、理解するのが無理だと悲観しないでほしい。数学的には“無理”とは既約分数で表せないという意味であり、決してネガティブな意味ではないのだ。

はみだし
すてーじ

日本の未来は明るいな！
⇒僕の未来も明るければいいなあ

(工・院 森森舎)
(一筋の光明も見えない；編)

はみだし
すてーじ

縦横無尽にはみだしたい
⇒x軸、y軸だけでなくz軸方向にもはみだしてくださいね！

(工・院 まる)
(世界は3次元ですよ；編)



みかん のおすすめ本

真実の10メートル手前

著 米澤穂信



記事執筆者のコメント

悲劇を描きつつもどこかスッパリとした余韻を残す短編集です。適度な長さで読みやすい作品ぞろいですので、空いた時間に読んでみてはいかがでしょうか。

ジャーナリストと聞いて抱くイメージは人それぞれだろう。彼らの中には扇情のために事実をねじ曲げて伝えようとする者がいるのかもしれない。しかし、ただ純粋に真実を追求しようとする者もいるのではないだろうか。今回紹介する『真実の10メートル手前』は、癖はあるが頭の切れるジャーナリストである太刀洗万智が、自身の遭遇した事件の真実を一見冷ややかながらも情熱的に突き止める物語を収めたミステリー短編集だ。

本書は表題作の「真実の10メートル手前」に加え、「正義漢」「恋慕心中」「名を刻む死」「ナイフを失われた思い出の中に」「綱渡りの成功例」の計6つの作品を収録している。表題作は太刀洗による一人称で描かれているが、その他の短編はどれも彼女以外の人物の視点から描かれており、これが本書の

最大の特徴となっている。短編ごとに変わる語り手の心情が鮮やかに描き出されることで、一つ一つの作品が違った印象を与えるものとなっているため、読者はより物語に引き込まれることだろう。また、それぞれの短編の中には一見なぜそのようなタイトルになったのかわからないひねったものもあるが、その理由はどれも結末で明らかになる。読後には誰もがタイトルの秀逸さに感嘆し、魅了されるに違いない。

好かれも嫌われもするジャーナリストという立場から事件に向き合う姿を描くことで、この職業がどうあるべきかを考えさせられる場面もあり、メッセージ性の強い作品となっている。悲劇的な事件を前にしても積極的に真実を明らかにしようとする太刀洗の姿は、本当の正しさを知るヒントになるはずだ。



梁和 のおすすめ本

項羽と劉邦 (上・中・下)

著 司馬遼太郎



記事執筆者のコメント

歴史小説とは単なる史実の羅列ではない。人物の会話や考えが鮮やかに描かれている。その上で時代考証もしっかりしており、歴史好きも小説好きも楽しめる。

「英雄」とはどのような存在だろうか？ 常人とはかけ離れた優秀な能力の持ち主だろうか？ どこか遠く感じる英雄達。今回紹介する本は中国のある2人の英雄の話である。

紀元前200年頃、大陸統一を成し遂げた始皇帝が没し、中国大陸は混迷を極めていた。悪政をなす秦を討つべく次々に起つ諸侯。その中にひときわ輝く英傑がいた。本作の主人公項羽、名門出身の勇猛な將軍であった。一方もう1人の主人公劉邦は田舎の農民で、大した能もなく遊び歩かばかりのゴロツキの頭であった。しかし乱世は彼をも否応なく起たせる。

項羽はその武力のもとに敵を次々に下し、天下を掌握した、かに見えた。しかし、そこに立ちはだかったのは驚くべきことに劉邦だった。元より一介の遊び人に過ぎない彼だが、数多の漢達(あまたの漢達)が彼に惹かれ、劉邦の力になりたいと動いていく。

そんな形容しがたい魅力が彼にはあった。それがいつしか、劉邦を項羽と並び立つまでに押し上げていたのだ。

とはいえ、やはり圧倒的な力を誇る項羽を前に劉邦は敗北を重ねる。それでも名將軍・韓信、名軍師・張良らが中心になって劉邦を盛り立てていく。武の項羽、人の劉邦、相異なる力を持つ両雄は幾度も矛を交え、ついには「四面楚歌」の由来ともなった、あの垓下の戦いへと向かっていく……。

本作では、項羽、劉邦のほか、その側近などの近い人の視点から各人の様子が描かれている。それは我々に、偉業をなし、常人からは遠く感じる彼らもまた、泣きも笑いもする人間なのだと思近に感じさせる。また劉邦の、天運・人運に頼みきったような史上にも奇特な天下取りのさまは、ある種の滑稽さを感じさせ、きっとあなたの英雄観を塗り替える。

UROKO MATSURI



映章 のおすすめ本

たったひとつの冴えたやりかた

著 ジェイムズ・ティプトリー・Jr.
訳 浅倉久志



記事執筆者のコメント

1986年に書かれた短編SFです。秋の夜長に少女たちと一緒に宇宙に旅立ってはいかがでしょうか。気に入ったら原著にもぜひチャレンジしてみてください。

この物語は16歳の少女コーティーが、小型宇宙船で銀河へ旅立つところから始まる。好奇心・若さ故これからの冒険に胸を躍らせながら眠りについたコーティー。ところが、翌朝目が覚めると頭の中に未知のエイリアン、シロベーンが棲みついていた。まだ成熟していると言うには早い1人のヒューマンと1人のエイリアン。2人は意気投合し、旅を続けることになる。一見奇妙な関係ではあるが、そんなことはお構いなしに彼女らは「友情」を深めていく。

では、「友情」とは何だろうか。彼女たちは互いのことをよく知らないどころか、種族さえも違う中、友情を育んでいく。そこにあるのは互いへの共感だけ。我々人間の友情も互いに相違点があることはわかりながら、どこかに共通点を見つけて芽生えていく、そういうものではないだろうか。

ところで、タイトルとなっている「たったひとつの冴えたやりかた」はコーティーの口癖である。彼女が「人生」の分かれ道に立つたびに出てくるこの言葉は、私たちに「人生」とは何か考えさせる。

人生には、「あの時こうしていれば」と思うことがあるだろう。でも彼女にはそれがない。彼女にとって人生とは「たったひとつの冴えたやりかた」なのだ。人生には分岐点がある。人間はその時々で常に最善の選択をしているのではない。間違えたと思っても、後に振り返ればそれがよかったということもあるだろう。そして、仮にやり直せたととしても同じ道を歩む——その道こそ人生なのではないか。

彼女たちの友情、そしてコーティーの選んだ人生からあなたは何を感じるだろうか？



たらく のおすすめ本

神の値段

著 一色さゆり



記事執筆者のコメント

第14回「このミステリーがすごい！」大賞を受賞した作品です。この小説を読んで、現代アートの奥深さを感じてみてはいかがでしょうか。

「なぜ絵画にこんな法外な値段がつけられるのだろう」という疑問を持ったことがある人にはぜひ読んでほしい。この小説を読むことで、現代美術品の価値がいかにして決まるのかわかるからだ。この本の作者は、3年間東京のギャラリーに勤務していたという経歴の持ち主である。その経験を生かして美術界の表と裏を生々しく表現しており、そのリアルかつ鮮やかな描写で読者を魅了する。アートとビジネスの問題が複雑に交錯した、スリリングなサスペンス小説である。

現代美術の世界的な巨匠、川田無名。彼の正体を知る者は、彼の作品を扱う画商、永井唯子ただひとり。唯子のアシスタントである主人公、田中佐和子でさえ、川田の素顔を知らない。ある日、唯子のギャラリーに、オークションに出せば10億はくだらない川田の傑作が運び込まれるが、その

翌日、唯子は何者かに殺されてしまう。佐和子は犯人を突き止めるため、警察とともに重要参考人である川田の正体をさぐる。しかし、徹底した彼の秘密主義を前に手も足も出ない。そんな中、美術界にはびこる汚れた金の支配が佐和子の前に立ちはだかって……。果たして佐和子は、川田の正体を明らかにすることができるのか。そして、犯人を暴くことができるのか。

佐和子は初め、美術にさほど関心がなく、川田の作品を高額で購入する人が理解できなかった。しかし彼女は、川田の過去や、作品にかける想いを知ることでアート作品に対する考え方を大きく変えていく。その変化は、美術についてよく知らない読者にも鮮烈な印象を与える。いつの間にか、あなたがアート作品に抱くイメージも変わっているはずだ。

はみだし
すてーじ

皆の衆、はみだす準備はいいかー！
⇒はみだす準備ができてなかりと、はみだしてしまうものなのです。

(工・3 Soso)

(はみだしたら困ることは書かないに限る；編)

はみだし
すてーじ

夏祭りに行きたい人生だった…。
⇒わかる

(工・1 三丘生)

(まあ、私は行ったんだけどね；編)